

## シンポジウム

## 病院図書室における資料保存と廃棄

日本病院会全国図書室研究会 (1992年9月4日、神戸市)

## 座長発言

戸津崎 茂雄

(京都南病院副院長)

京都南病院の戸津崎です。「病院図書室における資料の保存と廃棄」についてのシンポジウムを始めます。

図書室の使命は、言うまでもなく、資料を収集し、保存し、利用に供していくことであろうと思います。

しかし、「病院図書室」における現実、年々増加している新しい医学資料を収集保存していくためのスペースが既に限界に達していたり、あるいは限界に達しつつあるということだと思えます。「病院図書室」においては特に、スペースの無制限の拡大は不可能であり、スペースには限りがあります。

この限りあるスペースを少しでも有効に使うと、古くなって利用の少なくなった資料が、廃棄あるいは別置というような形で日々図書室から消えていっているのも現実だろうと思えます。

そのような中で「病院図書室における資料の保存と廃棄」について考えてみることは意味のあることだと思えます。

主催者の方から、利用者の立場からの発言が欲しいということでしたので、一般病院における医学資料の利用の大きっぱな傾向がわかればと思い、簡単なアンケートを私どもの病院の医師で取ってみました。医師26名からの回答です。

まず、「文献の検索は何年前のものまでですか」という問いには、5年前までが26人中12人で46%、10年前までが26人中21人で81%、15年前までが26人中23人で約90%でした。

次いで、「医学雑誌は何年くらい病院図書室に残しておくべきか」という質問を総合雑誌と専門雑誌に分けてしてみました。総合雑誌では、5年から10年の保存で良いという人が約85%で大部分でした。しかも、総合雑誌は5年の保存で良いとする者が26人中16人、62%と半分以上ありました。一方、学会誌などのいわゆる専門誌になると、もう少し長く保存してほしいという回答になります。専門誌が5年で良いとする人は30%くらいしかおらず、10年間で良いとする者は26人中10人、20年間の保存が必要だとする人が26人中7人。要するに20年まで保存してほしいという意見が累積96%になります。総合雑誌の方は割と短くていいけれども、専門誌は長く残してほしいというのが、意見のようです。

先ほども申しましたけれど、病院図書室にはスペースの制限があります。雑誌のタイトル数を増やせば、そのぶん保存期間は短くなりますし、保存期間を長くしようとすると、タイトル数が少なくなるのはやむを得ないことと思います。そこで、そのどちらを希望するかという質問をしてみました。そしたら約7割の人が、保存期間が少々短くなっても、タイトル数を増やしてほしいという意向のようでした。少ない人数ではっきりしたことは言えませんが、利用者特に医師の考えの大雑把な傾向はわかるのではないかと思います。古い資料を少々犠牲にしても、新しい資料を種類多く欲しいということになろうかと思えます。

一つだけスライドを見ていただきたいと思えます。この一年間、実際に文献複写の依頼が、何年くらい前のものまでなされているのかを調べてみたものです。一年間の統計で、ドクターが自分で勝手にコピーした文献は含まれていません。あく

までも病院図書室に依頼のあった文献のみです。

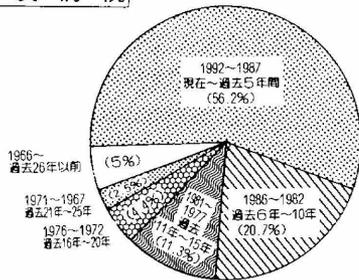
下が私どもの京都南病院で、上に大阪の住友病院のものを拝借しました。2つの病院で、1年間の総件数、傾向は似ているというよりもほとんど同じ結果が出ています。5年前までの文献が約半分。5年から10年前の文献が半分の半分。その残りの半분이10年から15年前まで。またその残りの半분이15年から20年というふうに、5年ごとに区切ってみると、このような結果が出てきます(図1)。

<図1>

利用文献発行年の比較 (2病院)

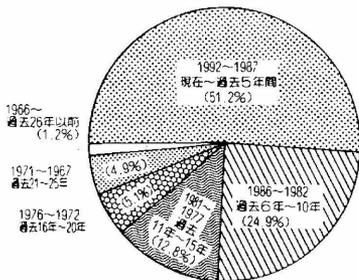
—— 最近一年間の相互貸借件数より ——

住友病院



● 総件数 910件

京都南病院



● 総件数 946件

以上のようなことを頭の隅に置いていただき、シンポジウムに入っていきたいと思います。

資料保存上の諸問題

千住 とも子

(日生病院)

1. はじめに

病院図書室はその規模、歴史によって所蔵する資料の質が違います。しかし、資料の収容能力に遅かれ早かれ限界が来るという事は共通に言えるのではないのでしょうか。

そこで今回はすでに経験したかいずれ経験するか、どの図書室でも必ず経験する保存スペースの限界ということに視点をおいて「病院図書室における資料の保存」について考えてみたいと思います。

2. 保存のための廃棄

私が勤務します日生病院は1924年の創立で、当時の雑誌やハンドブック、単行書を1990年10月まで保存していました。図書室が満杯で、それらは別館にある会議室と畳2帖ほどの小さなプレハブ小屋2棟に別置されていました。2年前ある日突然、会議室を明け渡すようにとの指示がありました。

その明け渡しまでの期間は明け渡し作業を含めて約2カ月。考慮に要する時間的余裕は僅かしかありませんでした。図書委員会で討議の結果、他に収納スペースが得られなければ医学中央雑誌(1928年から所蔵)は残す、それ以外は希望者があれば寄贈し、残ったものは廃棄せざるを得ないという結論に至りました。

幾分か希望者の手に移りましたがほとんどは清掃業者への廃棄となりました。資料の売却は引き取り業者がなく行われませんでした。

現在、残された医学中央雑誌はプレハブ小屋に収納されています。ここには照明の設備がありません。本を探す時には懐中電灯を必要とします。また、直射日光こそあたりませんが空調等の設備がなく温度や湿度が自然環境そのままにあります。この環境で経過しますと本が傷みます。せっかく残した医学中央雑誌ですから図書室の書架構成を再度検討して図書室の方へ移し替えようと考えて